

連載

サンダル履きまま旅

1

◇バガンの豎琴弾き◇

寺井融

Terui Toru

気ままな一人旅が多い。服装は、ポケットが大きいサイズのサハリルックである。靴は履かない。どこにでもサンダル履きで出かける。

先日、台北でマッサージュ店に寄って、午後には帰国した。成田空港でカメラマンの友人が、「アツ」と小さく声をあげ、当方の足元を指さしている。いつもはサンダルなのだが、そのときはスリッパ履き。店で履きかえて、そのまま帰ってきたらしい。

尖塔が欠けたパゴダ

サンダル旅の思い出を書く。感動したミャンマー（旧ビルマ）の話から。

ミャンマーの目玉は、国の中ほどにあるバガンである。アンコールワット（カンボジア）やポロブドール（インドネシア）と並ぶ、

世界三大仏教遺跡の一つで、赤土の大地に尖塔が欠けたパゴダ（仏舎利）が、約二千数百も点在している。一九九三年に初めて訪れたときは、煉瓦が崩れた、その荒涼たる遺跡群に、ただただ圧倒されたものだ。

九六年のビジット・ミャンマー（国際観光年）を契機に、遺跡群



黄金のパゴダ

の真ん中を歩道つきのアスファルト道路が走り、街灯までついた。欠けていたはずの尖塔も、新しい煉瓦で補強されている。コンクリートで、お城を修復したようなもので、昔を知っている者にとっては、情けない気分となる。

遺跡群の入口には、黄金色に輝くシユエズゴンパゴダがある。前には外国人観光客が集うレストランや、農協のコメ倉庫のような映画館などもあった。その一郭の民家から、明かりがもれていたので訪ねてみる。

「レストランにお客さんがたくさんいるとき、豎琴を弾いています。チップが収入源ですね。食事代に演奏代が含まれていると思われて、何ももらえない日もあります」と四十七歳のご主人は語

る。妻は四十二歳で、娘は十一の豎琴弾き一家だったのである。

豎琴で「上を向いて歩こう」

一曲所望する。ミヤンマーのメロディを奏で出した。奥さんが、カスタネットのような打楽器で伴奏を始める。星がくつきり見える夜空に、哀切



バガンの豎琴弾き

の調べが染み込んで行った。

「アンコール」と叫んだら、「上を向いて歩こう」を弾いてくれた。譜面は読めず、曲は全部テープで覚えているという。一間かぎりの家、というより小屋には、仏壇だけが目立ち、家具らしいものはなかった。

「こんな稼業なので、子供の学校が一年遅れてしまつて…。本人が、もし医者になりたいたいと言つたなら、かなえてあげられる親になりたいですね」

彼ら三人に幸あれと思ひ、チップをはずんだ。夫婦は合掌を返してくれた。

九〇年代末の話で、隔月刊誌『造船重機』にも書き、気にもなつていたので、その後、バガンに行ったときには決まつて、レストランに出かけてはいるのだが、再会は果たしていない。

日本でも、かつては津軽三味線の替女さんや虚無僧が各戸をまわつて生計を立てていた。盛り場にはギター流しの人もいたけれど、いまはあまり見かけない。

豎琴弾きも、そうなる運命なのであろうか。音楽といえ、八二年にこんな経験もある。マンダレーホテル（現マンダレー

スワンホテル）のレストランで、ディナーをとっていた。食べ終わる頃合いをみはからつて、奥の厨房から男がやつてきた。身長は一尺八十五センチを超えていたのではなかったか。ビルマ（当時の国名）人としては、かなり大きめである。チーフコックだと名乗った。

「日本からのお客様がいらつしやると聞いたので、ご挨拶にうかがいました。お口にありましたでしょうか」

流暢な英語で話しかけられた。こちらはたどたどしく「デリシヤス、グッド」と答えた。

太った東海林太郎！

それに気をよくしたのか、彼は一曲歌いたという。「プリーズ」とうながしたら、直立不動の姿勢となり、やおら「見よ、東海の空明けて、旭日高く輝けば…」と、「愛国行進曲」を完璧な日本語で歌い出した。本当にビックリしましたね。子供の頃、日本の軍人に教わつたのだそう。太った東海林太郎さんの歌は、迫力があつた。

日本財団の笹川陽平会長のブログによれば、二〇〇五年にインドネシアのハンセン病の病院を訪れた際、患者の男性に「見よ東海の空明けて」と歌われて、驚いたと書かれている。いわゆる南方

(現在の東南アジアや南太平洋島嶼)では、広く流布していた「日本軍歌」の一つだったのかもしれない。

蛇足ながら、ミャンマー国軍はもともと日本軍の南機関に指導され、誕生した歴史を持つ。日本軍歌のメロディに、ミャンマー語の歌詞をつけて広く歌われており、「軍艦マーチ」も、軍の式典などで演奏されている。

九〇年代末に、かつて南方軍総司令部があったメイミヨを訪れた。昼に立ち寄ったカレー店では、鶴のように痩せた老人があらわれ、「ワタシ、リクグン、イマシタ」と言われた。彼はインドから英軍に連れてこられ、そのときはマネーがもらえなかった、日本軍の使い走りでは小遣いをもらっ

た、可愛がってもらった、と懐かしむ。

メイミヨは避暑地であり、英国風の街並みが残っている。カボチャ馬車みたいなメルヘンチックな馬車、毛糸の編物、マリオネットなどでも、有名な町である。

ミャンマー訪問20回

ところで、なぜビルマに行くことになったか。

英軍の捕虜収容所生活を描いた『アーロン収容所』(中公新書)の会田雄次京大教授に「ビルマにぜひ行ってもらいたいですね」と勧められたからである。アジアへ職場から調査団を派遣する話を持ち上がったとき、迷わずビルマ行きを希望した。

町の中を牛車がノンビリ走り、三、四十年前の



メイミヨのカレー店主

車が走っている。ドアは開け放たれ、鈴なりの客が乗っていた。百ドル札をホテルで両替しようとしたら、銀行に行つてほしいと言われ、銀行ではノートに紙幣番号を控えさせられたことなど、鮮明に覚えている。

四半世紀経った。その間、同国には二十回ほど訪れている。車やビルが随分と増え、牛車も都市部ではほとんど見かけなくなったものの、



メイミヨの馬車

人々の人懐こい笑顔は変わっていない。台湾、トルコと並んで「世界三天親日国」と言われている所以である。

夜十時過ぎでも、女性が一人で歩けるくらいに治安がよく、物価も安い。早く二十一回目の訪緬、サンダル履き旅行を実現したいと思っている。

■てらいとおる 昭和22年生まれ、46年中大法学部卒。旅行大好き人間で『ミャンマー百楽旅荘』朝まだきのベトナム『サンダル履き旅行』などの著書がある。日本旅行作家協会会員、ロングステイ財団広報委員。